
闇と少女と深海魚

水無月 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇と少女と深海魚

【ZPDF】

20729C

【作者名】

水無月一

【あらすじ】

深海魚のドロンには友達がいなかった。ある日、ドロンは唆されて「上の世界」を目指す。二人の視線で綴られる、光と闇の物語。

(前書き)

初投稿です。まだまだ下手くそですが、よろしくお願ひします。

私がつらい顔をすると、たいていの人は私の体調を気遣う。「大丈夫」とか「元気出して」とか、腫れ物に触るように問いかける声は、私をうんざりさせる。

どんな言葉も、私の病気を治してくれはしない。けれど私はその都度お礼を言う。せめて十歳児らしく振る舞うことが、私を育ててくれた人たちに対するせめてもの恩返しだらうし、近い将来死にゆく自分の務めなのだろう。

「エリー」

下でお母さんの呼ぶ声がする。私は返事をして、覚束ない足取りで階段を降りた。

暗い暗い海の底。低い水温、重い水圧。死の世界なんて呼ばれるみたいだけど、僕にはそうとも思えなかつた。

いつもの癖で、頭についている提灯をふいと振る。ずつしりと溜まつた暗闇のヘドロが、箒で掃かれたように姿を消した。かわりにゆらゆらとたなびく海藻や、海底に突つ伏したきれいな貝殻が僕の目に飛び込んで来る。僕は目を細めてその様子を眺めた。

僕のように光を操ることのできる魚は他にいない。少なくともこの辺には。だから僕は自分のことを気に入っていた。覆い被さつた闇を照らし、それまで隠れていた景色を眺めるのは、僕だけに「見えられた贈り物のような気がした。

「やあ、ドロン」

僕は声の主を探して、辺りを見回した。

「あ、こんにちわ、ヒューイーさん」

小さくお辞儀をした。ヒューイーさんは僕が生まれる前からここにいた。僕が定期的に顔を出し、を管理している、いわば主だ。ヒューイーさんはみんなの暮らしを支えている。

「元気にしてたかい？ 餌に不自由してない？」

その都度首を縦に振り、ヒューイーさんはそれはよかつたと顔をほころばせた。僕たちは助けあって生きている。誰かがお腹を空かせていれば、蓄えていた食料を分けてあげるし、何か目標があれば出来る範囲でサポートする。それは無理やり決められたルールというよりも、『死の世界』と呼ばれている深海では、暗黙の了解と言つていい。

そして、僕にも一つだけ悩みがあつた。

「ヒューイーさん、どうして僕には友達ができるのかな」

ヒューイーさんは苦笑しながらあぶくを出した。

「ドロンはいい子だよ。私が保証する。ただみんな、お前のいい所が見えていらないだけなんだよ」

「どうすれば僕のことを分かってもらえるのかな」
僕はため息まじりに呟いた。

「お前は自分にできることだけを一生懸命にやればいいんだ。そうしたらきっと、お前の気持ちは伝わるよ」

「僕にできる」とつて

「それはドロン自身が考えない」と

難しいなと頬を搔きながら、ヒューイーさんにお礼を言った。

「それじゃあ、私はそろそろ行くよ。今日はいろんな所を回らない

といけないから、忙しいんだ。ドロン、焦らなくていいんだからね。少なくとも私は、お前の優しい心を知っているよ。じゃあ、また「ヒューリさんと別れて、僕はぼんやりと考えることをしながら散歩を始めた。相変わらず暗く、静かな海底をあてもなく泳いだ。

「あ、ドロンじゃん」

いつも何匹かで集まつておしゃべりをしている、顔見知りの魚だ。今日は二匹で遊泳をしている。

「二、こんなには」

僕はこの魚たちのことが苦手だった。なんとか分からぬけど、僕のことが嫌いらしい。いつも僕を見ると意地悪な笑顔を浮かべるし、きつこことを言わされることも度々あった。それでも、

「僕もいっしょに泳いでもいい?」

と勇気を振り絞つて尋ねた。

「はあ? 身の程を知れつつーんだよ、ドロンのくせにさ。不細工な顔に、おまけに何だよ、その提灯。まつきり言つて気持ち悪いよ、お前」

二匹が揃つて笑つた。

「そんなこと言わないで、お願ひだよ。僕、友達がいないんだ」

「そりやそりや。お前みたいなの、誰も相手にしねーよ」

「そんな……」

僕はただ、友達がほしいだけなのに。自分自身の姿を見ることは出来ないけど、僕は自分に誇りを持っていたのに。絶望に打ちひしがれ、うなだれていると、一匹が思つ出したように口を開いた。

「そうだ」

嬉々とした表情で、踊るよつて泳ぎながら続ける。

「上の世界に行けよ」

「上の世界?」

「そりやそりや。お前も知つてゐるだろ。こりよつともつらじ上に行つたから、明るくて温かい海がある。そこに暮らす魚はみんな優しいらしくから、お前にも友達ができるかもしねりだぞ」

「本当に？」

せわしなく泳ぐ姿を田で追いながら、興味半分、疑い半分で聞き返した。

「上の世界は危ないって聞くけど、大丈夫なのかな」「大丈夫だつて。自分を変えるには特別な冒険も必要だぜ。それとも、ドロンは一生このままでいいのか」「それは……」 ぴたりと動きを止めて、にやにやと笑いながらまくし立てる。

「そうと決まれば善は急げだ。今からでも行つたほうがいい。大丈夫、みんなには俺たちが伝えておくから」「うん……わかったよ」

いまひとつ釈然としなかつたが、僕は海上に向かつてヒレを動かした。言われたことを全て信じたわけではない。それでも新しい出会いが僕を変えてくれる気もしたし、外の世界にたいする憧憬みたいなものもあつた。

冷たい水を蹴り、ひたすら上を田指した。やがて下の景色が黒い吹き溜まりのようになり、いよいよ引き返す決心も鈍つてきた。

「いいのか、あんな」と言つて
「厄介払いもできただし、別にいいだろ」「ヒューイの爺さんにばれたら、俺たちもただじゃ済まないぞ」「分かりやしないよ。ここじゃ餌も取れないで死んでく奴なんてざらなんだし」「それもそうだな」「じゃ、ナンパでもしに行くか」

どれくらい泳いだらうか。僕はもともと長距離を泳いだりはしないので、筋肉にかなりの負担がかかっているのを感じた。いい加減水をかくのもつらくなり、少しばかり休憩をとることにした。

先程から視界もかなり開けてきて、何匹かの魚が僕をもの珍しそ

うに眺めている視線も感じることができた。けれど今は話しかけることよりも、息を整えるのが先決だ。呼吸をするたびに、エラから大きなあぶぐがはきだされた。

「お兄ちゃん、ダーレ？」

間延びしたかわいらしい声に振り向くと、小さな、子供っぽい魚が好奇の目を僕に向けていた。

「僕はドロンって言うんだ。深海から、友達を作りに来たんだ。坊やはなんて言うの？」

「んつとね、マイヨ」

マイヨはもじもじしながら、嬉しそうに答えた。

「そつか、いい名前だね。マイヨは一人なの？」

とたんにマイヨは顔を曇らせる。

「お母さんとお父さん、突然いなくなっちゃったの。」

「そつなんだ……」

肩を落とすマイヨの姿を見て、自分の軽薄な質問を反省した。

「お兄ちゃん、いつしょに遊ぼうよ」

「そつだね、何しようか

「かくれんぼがいい！」

「こうして遊ぶことで、少しでもこの子の寂しさが紛れれば、お互ににとってプラスになるように思つた。マイヨが隠れる間、目を閉じながら初めての友達ができた喜びに、体を震わせた。

何日か経つたある日、僕たちはいつものように遊んでいて、逃げるマイヨを追いかけていた。僕は結局ここに居着いてしまった。居心地も悪くないし、何よりマイヨを放つて旅立つわけにもいかない。僕たちは適当な岩場を見つけて、そこで寝食を共にしている。毎日が充実していて、僕は深海で暮らしていたときとは違つ幸福感を味わっていた。

追いかけっこを続けていたさなか、ふと前方に見慣れない物体が漂っていることに気が付いた。それはとてつもなく巨大な海藻のよう

に見えた。海藻にしては細かい隙間があつて、小さな入口らしきものもある。

僕は直感的に、この物体の異様な不気味さに恐怖を覚えた。しかしあるうことかマイヨが、そのぽつかりと開かれた口の中に入つて行つてしまつた。

僕は慌ててマイヨを追いかけた。

「マイヨ、待つて。その中に入っちゃダメだ

しかしマイヨは止まつてくれない。その手には乗らないと言わんばかりに、益々スピードを上げる。僕も続いて、丸く縁取られた入口をぐぐる。凶悪な魚に飲み込まれたような錯覚を覚えた。なんとかマイヨに追い付こうと、僕は重い体に鞭を打つた。やつと、追い付いた。

「マイヨ、すぐに、ここから、出るんだ」

息が切れて、喘ぎながら言い聞かせた。

「どうして？」

「何か、嫌な、予感がする」

「嫌な予感つて……」

マイヨが言いかけたそのとき、体が強い力で引っ張られた。僕は一瞬でパニックに陥つた。

突然の出来事に声も出せない。なんとか脱出しようとがいでみても、隙間だらけの物体が絡みつくばかりで、そのまま上へ上へと持ち上げられる。

「おつ、なんかスゲエの取れたぞ」

あまりの眩しさに目を開くことが出来なかつた。同時に猛烈な息苦しさが僕を襲つ。

廻転とする意識の中で、ヒューリーさんの言つていたことを思い出していた。

海の外にはチジヨウと呼ばれる世界がある。そこには確か二ンゲンとかいう生物がいて……

「こいつは高く売れそうだな。卸し売りにするよりも、水族館にで

も売り付けるか

何やらわからない言葉を発するニンゲンを尻目に、僕は、死ぬのかなあと思いの外冷静に、突如降り注いだ身の上の災難を見つめていた。

「お兄ちゃん、助けて」

甲高い、悲痛な声だ。その声に勇気づけられこそしなかつたものの、それでも唯一の友人の必死な願いをなんとか汲んでやろうとう気持ちが、僕に最後の悪あがきをさせた。

「助けて、助けて」

僕もそれこそ死に物狂いでもがいた。けれどどうすることもできない。

「何だこいつ、生きがいいな」

ニンゲンは僕の尻尾を掴み、そのまま僕だけ別の場所に移された。遠のいていく意識の中で、マイヨの声だけがいつまでも反響していった。

ヒューイさん教えてください。僕に出来ることって何ですか？

「水族館」

私はお母さんの口から飛び出した単語をオウム返しにすると同時に、目を丸くした。

「どうしてまた」

「どうしてつて……エリが行きたくないならいいんだけど」

「行きたくないってわけじゃないんだけど」

正直、あまり乗り気じゃない。外を出歩くのは好きじゃないし、

それを押し切るほど魚好きかと言われば、そういうわけでもない。

それでも、私の歯切れの悪い返答に困惑した顔をしているお母さんを見て、

「じゃあ行こうか」

と、結局断ることが出来ないのだから、世話はない。

お母さんは、私が入院をやめてからといつもの、頻繁に外出に誘うようになった。

初めは私も、とてもそんな気にはなれなかつたが、自分の運命を受け入れるようになつてからは母親の言葉を反故にはしなくなつた。自分のことでは家族がつらい気持ちになるのは嫌だつた。それとも自分自身気付かぬうちに、生まれてこれてよかつたと思えるような、そんな思い出が欲しくなつたのかもしれない。

「よかつた。じゃあ、早速準備しましょ。」

「えつ、もう行くの。お父さんは

お母さんは笑顔を崩さないまま、

「お父さんは出張でいないよ」

と答える。聞かなきやよかつたな、と後悔した。お母さんの頬の筋肉がぎこちなく緊張している。お母さんがこんな顔をするとき、お父さんは私の知らない女の人と会つている。

私に心配かけまいと、必死に笑顔を取り繕つお母さんがいたたまれなくて、「そななんだ」とだけ言つて、私は部屋に戻つた。

私たちはこうして傷口を舐めあつてゐる。私はときどき、こんな関係を悲しく思う。

「おう新入り、やつと田え覚ましたか」

意識を取り戻して、状況確認をする暇もなくそんなことを言われるもんだから、僕はかなり混乱した。

確か、二ングンたちに襲われて……

「そうだ、マイヨは」

辺りを見回してみた。多種多様の生物がいる。海藻や岩場もあり、その隙間から気泡が断続的に出でている。透明な壁に仕切られていて、

とても狭い海のようだ。しかし、ビームを見てもマイヨの姿は見当たらず、僕は落胆した。

「おー、どうしたってんだよ。落ち着きのねえ奴だな」

「マイヨが、友達がいないんだ。ここには来てないの？ 小さくて、かわいい子なんだけだ」

「残念だが、ここに来たのはお前だけだ」

「そんな……ここに来てない魚たちはどうなるの」

恐る恐る尋ねた。

「どうなるって、そりや喰われるよ、人間様にな。子供だったら、天ぷらにでもされてんじゃねーの」

ある程度予想はしていたが、不安が確信へと変わり、僕はショックを隠せなかつた。テンプラがなんのことかは分からぬが、マイヨが死んでしまつたことに変わりはない。

「なんでそんなひどいことを」

「おいおい、それは言いつこなしだろ。体格を見るに、お前も草ばつか食つてたわけじゃねーだろ」

「だけど僕は友達を食べたりはしない！」

理屈では分かつてゐる。けれど、友達を失つて、その上に心ない辛辣な言葉を浴びせれ、僕もかつとなつた。

「ま、その辺の問答は置いといてだ、お互い自己紹介ぐらいしようや。俺はキール。人間たちの言うところの、ウツボつてやつだ。お前は」

キールは今まで見たことのない姿形をしていた。体は細長くうねり、鱗が表皮を覆つてゐる。大きな丸い目をしていて、時折見える歯は細かく鋭い。

「ドロン」

沈んだ声で、簡潔に答えた。

「暗い奴だなー。まあ、ここじや俺が先輩だからな。わかんねえことがあつたら何でも聞いてくれや」

そんな気分にはなれなかつた。しばらく押し黙つて落ち込んでい

たが、それで事態がよくなるわけもなく、とうとう僕も口を開いた。

「ここは何なの」

「ここか？ここは水族館つていいて、そうだな、人間を観察すると

「こうだ」

「ニンゲンを？なんで」 そんなことの為に、僕はこんなところに連れて来られたのだろうか。

「人間側からしたら違うんだろうけどな、俺らからしてみたらそんなもんだよ」

「ふーん」

よくわからなかつたけど、適当に相槌を打つた。言われてみれば、確かにたくさんニンゲンが僕たちを眺めている。大きいのや小さいのがいて、ニンゲンの大人と子供かな、と言われた通りに観察してみる。

いつも外出のときにかぶるピンク色のニット帽を引っ込み、お母さんといつしょに外へ出た。

春風の吹く穏やかな気候で、木々には桜の花が萌えている。お母さんは花粉症対策にマスクを装着していて、私たちが並んで歩くとなかなかに不格好だつた。

「いい天気ね。これだけ暖かいと、洗濯物もよく渴くわ。私、春つて一番好きだな」

「そうだね」

手を繋ぎ、私は歩道側を歩きながら同意する。とは言つても、私は春が嫌いだつた。風に舞う桜の花弁も、穏やかにせせらぐ小川の旋律も、全ての始まりを告げる季節といふこと自体が、私を嘲笑つてゐるような気がしてならない。

「エリちゃん大丈夫？疲れたら無理しないで言つてね」

「大丈夫だよ、ありがとう」

水族館までの道程はそう遠いものではない。恐らく、健康体の人間が歩いたら十分程度でたどり着くだろう。しかし、お母さんは私の足に合わせて歩くので、このペースでいくと倍は掛かりそうだ。いつもとして歩くのは、もはや意地と言つてもいい。

スマーズとは言えないが、お母さんと談笑をこなしながら、半ばまで歩いた頃だろうか。前方の丁字路から小学生の集団が姿を表した。時間から考えるに新入生だろう、真新しい制服に身を包み、新鮮な笑顔を振り撒いている。あの子たちには、私にはない輝かしい未来がある。

すれ違いやまに、傷ひとつないランドセルに陽光が反射して、私はあまりのまばゆさに目をつむった。

「あつ、見ろよ。ハゲだ、ハゲ。女子なのに変なのー」

はつとして目を開くと、全員が私の顔を見て笑っている。お母さんが戸惑いながら、

「気にしちゃダメよ」と私の顔色を窺う。

「大丈夫だよ、ありがとう」

私は帽子を田深に被り直しながら、気持ち早足でその場を去った。私の髪。今はもう投薬の副作用で抜け落ちてしまった、私の長い髪。病気が悪化するまで伸ばしていた、柔らかく、まつすぐな黒髪は私の自慢の一つだった。病気は私からいろんなものを奪つた。髪を奪い、友達を奪い、時間を奪い、最後には私の命を奪おうとしている。

もはや私であつて、私でない。イーシアチブなんてものは、とうの昔に私の手元を離れている。

歩きながらお母さんの顔を見やる。笑われることには慣れていたけれど、そのことで周りの人を見ているのが辛かつた。

這う這うの体でなんとか水族館に着いた。結局かなりの時間が掛かってしまい、若干の後悔も入り交じる。入場券を買い、自動ドア

の前に立つた。

「ところでそれ何。地元じゃそんなのが流行つてるのか」

僕が律儀に観察を続けていると、キールはめんどくさそうに、力無く揺れる提灯を目で追つ。

「これ？ 光るんだ」

そういうえば深海を出てからというもの、僕の提灯は完全に影を潜めていて、今ではただの飾り然と動きに合わせて漂つてているだけだ。僕は久しぶりに明かりを点そうと、力を込めた。ぼうっと弱々しい光りを放つた。

「何だよそれ。中途半端だな」

キールが期待外れといった様子で欠伸をする。

「おかしいな」

以前はこんなに情けない光りではなかつたのに。僕自身、拍子抜けを食らつた。試しに何回か点けたり消したりを繰り返すが、依然として、今にも消え入りそうで頼りない。

「ま、いいんじゃねーの。人間共にはうけてるみたいだし」

ふとニシングンたちを見ると、確かに息を漏らし、嬉しそうに笑っている。

「喜んでくれているのかな」

「まあ、喜ぶって言つても、滑稽だから喜んでるつて感じだな。それ、俺から見ても変だし」

キールは悪びれる様子もなく、淡々と言つてのける。悪意はないのだろうが、だからといって僕を傷つけないということはない。

「変、か」

僕は力を込めるのをやめた。ああ、とため息が聞こえる。

「何だよもつたいないな。ここでは芸のある奴のほうが待遇いいぞ。俺なんか欲しくたつて何もないつていうのに、贅沢病だ。何のため

に付いてんだよ」

何のためって言われても、そんなこと僕が聞きたい。

深海で暮らしていた頃には、何でも照らしてくれるこの提灯は僕の怠慢だった。それがいつしか、蔑まれ、笑われていくうちにコンプレックスへと変わつていつた。

もうこの提灯は封印しようと決意したとき、一組のニンゲンの親子が僕のこる小さな海に近づいて来ることに気が付いた。

するとどうしたことが、さつきまで笑つて僕たちを眺めていた子供連れが、せわしなく移動を始めた。その仕草がどうにも不自然で、凶暴な魚から逃げるような、そんな慌ただしさを感じる。

「見ろよ、おもしろいのが来たぜ」

退屈そうに貝を小突いていたキールが、身を翻して壁に張り付く。

「おもしろいって、何が？」

水族館に来たばかりの僕には、彼らの言つおもじろいニンゲンの基準が分からぬ。

「だって見ろよ、あいつ女のくせに毛がないんだぜ。それに、今の人間たちの反応つていつたら。ほんと馬鹿だよな。観察して、一番楽しい瞬間だ」

「女は毛がないと変なの？」

「変だつつーの。例えばな、あれを見てみ」

キールがあごで指すので田をやる。燈色をした毛を携えたニンゲンが、背の高いニンゲンにくつついてはしゃいでいる。

「まあ、人間の女なんてあんなもんだ。あれに比べたら変だつて分かるだろ」

「ピンクは変なの？」

女の子の頭部には毛とは違つよつて見えるが、一応それらしきものがあった。

「馬鹿、あれは帽子だろ。毛がないことを隠してんだよ」

「じゃあなんで他のニンゲンたちは逃げたの？」

サメとこう生物がいるのを聞いたことがある。獰猛で、肉食の性

質を持つそれは、他の魚はその姿を見ただけで逃げ回るといつ。

彼女もそういうたせいで逃げられたのだろうか。しかし少女の腕は誰よりも細く、とても力があるようには見えない。腕だけではない。体全体から脆弱さが滲んでいた。

「病気なんだろ、多分」

「病気?」

「ああ、毛がないなんて普通じゃないからな。それで子育て熱心なお母さん方は我が子に移されたら敵わないってことで、場所を移したわけだ。馬鹿だね」

長い舌を出しながら、念を押すように『馬鹿』と二つ単語を繰り返した。

観察することに気を取られすぎ、少女の血の氣のない顔をまじまじと見つめているときに、初めてこの子が僕のことをじっと眺めていたことに気付く。

少女と目が合い、背中に冷たいものが走るのを感じた。なんだろう、この感覚は。もの悲しく、それでいてどこか懐かしい不思議な感覚。

そのまま少女は居座り続け、何かを告げたかと思うと、親は心配そうな顔をしながら無数にある別の海へと向かい、少女は延々と僕を目で追つた。

少女は毎日のように水族館へと足を運んだ。僕の覚えている限り、同じ二ングンが繰り返し来訪することは、一人の例外を除いて他にない。そして日課のように、僕のいる海を食い入るように鑑賞する。僕は少女と目が合う度に不思議な感覚に捕われては、喉に刺さった小骨のようなもじかしさに首を傾げた。

「毎日のように来てるけど、随分気に入られてるな。なんか心あたりはないのか」

キールが氣怠そうに言つ。なんでキールはそんなにやる氣がないのか以前尋ねたことがあるが、マンネリという聞き慣れない言葉が

返ってきた。

「何もないはずだけどなあ」

それは間違いないはずだ。ニンゲンとの面識は「」が初めてなわけだし。

「変な奴同士、気が合ひつてことが」

「変とか言わないでよ」

少女はニンゲンから見ても変なりじく、遠くで少女を指差し、何やら囁いている。

「僕には違いがわからないよ」

僕の眩きは、泡になつて小さな海を昇つていった。

「一体自分はどうしてしまつたのだろうか。」

お母さんに連れられて水族館に行つて以来、私は毎日のようにあの場所へ足を運んでいる。あの場所、というのは、かわいらしげンギンでもなく、まして花形のイルカショーでもない。たつた一匹の深海魚に私は惹かれ、言つことを聞かない足を引きずつてまで通いつめる。

お母さんはそんな私を複雑な気持ちで見守つてゐる。仕事があるので毎日付き合つうというわけにもいかないが、入場料だけはいつも払つてくれていた。

今日も例の水槽の前に落ち着き、じつと深海魚を見据えていた。これだけ毎日顔を見せると、スタッフも私のことを覚えているようだまに声を掛けられたりもする。「お魚が好きなの?」と聞かれたときには返答に困つた。サバの味噌煮以外には今まで興味もなかつたくせに、私は何を求めているのだろう?

少女はいつものように泰然自若としている。毎日通っているのだから退屈つことはないのだろうけど、この子はいつも鉄板面で、感情が顔に出ることはなかつた。

僕は次第に少女が可哀相に思えてきた。

なぜこいつも疎まれ、避けられるのだろう。そんなにこの子は変なのだろうか。変だったら嫌われても仕方ないのだろうか。この子は僕に似ているのかもな、と自嘲したときだつた。そこまで考えて、ようやくずっと引っ掛けついた疑問が氷解した。

彼女と目が合う度に背筋に走る、暗く、冷たく、重たい、それでいて懐かしい感覚。

深海だ。

僕の故郷で、周りからは死の世界なんて呼ばれている、あの深海の雰囲気が少女の身体中から発散されていたのだ。

この子はきっと苦しんでる。何かに心を痛めてる。ヒューリイさんは言った。僕にできることがありますといふ。

僕は何の取り柄もなく、助けを求める友達すら救えない、駄目な魚だ。

だけど

ぐつと頭に力を込める。

だけど僕の提灯は、深海の闇を照らす光だ。

力強い光が燐然と輝く。僕はその光が、少しでも少女に届くよう祈りを込めながら、いつものように、頭を振つた。

少女が大きな目を、ゆっくりと細めた。

了

(後書き)

初めまして、水無月一と申します。作者の拙文に最後まで付き合つてくれて、本当に感謝です。これからも日々精進していけるよう努力したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0729c/>

闇と少女と深海魚

2010年10月8日15時36分発行